

## 『児童文選』とその後継誌についての研究

太郎良 信\*

### A Study of the Monthly Magazine “Jidou-Bunsen” and Its Successors

Shin TAROURA

1910年代末から1940年代において、各種の綴方学習雑誌が月刊で発行されている。本論文は、1927年頃に創刊されたとみられる雑誌『児童文選』（帝国普通教育奨励学会）およびその後継誌とみられる『児童綴方』（児童綴方教育奨励会）『新生綴方』（同前）について検討する。『児童文選』は綴方の「添削批評」を目的とする会の会誌であり、会員の文集の性格を有していた。その後、『児童綴方』への改題を機に読物が加わるが、綴方の「批評添削」の会の会誌としての性格は保持していた。両誌は東京府の都市部（1932年10月以降の東京市域）の教育に関心の高い家庭や教師に基盤を持っていた。1932年には、会員制を止めて、市販雑誌『新生綴方』として再発足をしたが、およそ1年後に、類似誌に統合する形で終刊した。『児童文選』や『児童綴方』のような綴方学習雑誌が存在した背景には、国語科綴り方の成績向上に対する保護者の期待があったものとみられる。

#### はじめに

1910年代末から1940年代において、児童を読者対象とする各種の綴方学習雑誌が月刊で発行されている。

たとえば、1919年には『東京児童の綴方』（東京児童の綴方社）が創刊されている。同誌は、1920年より誌名と社名の両方から「東京」を除いて『児童の綴方』（児童の綴方社）と改め、全国誌としての姿をとることとなる<sup>[1]</sup>。また、1925年には学年別の『読方綴方鑑賞文選』（文園社、以下『鑑賞文選』と表記する）が創刊されている。さらに、1926年には低学年用・高学年用・高等科用の3種の『児童学習綴方研究』（文録社、以下

『綴方研究』と表記する）が創刊されている。これらは、いずれも、定価が付され、第三种郵便物の認可を得た市販雑誌としての体裁を整えたものである。

ただし、綴方学習雑誌といっても、上記のような形で発行されたものばかりではない。これまでの研究においては顧みられぬままであるが、綴方の添削批評をおこなう会員組織の会誌として発行された綴方学習雑誌も存在したのである。

このように、各種の綴方学習雑誌が生まれたり、多様な形で発行されていることは、1920年前後から、綴方教育に対する教師や保護者の関心が急速に高まっていたことを示すものであり、出版事業としても採算が見込めるほどの状況であったことをも示唆している。

ここでは、綴方の添削批評のための会員組

\* たらうら しん 文教大学教育学部心理教育課程

織の会誌として創刊された『創作鑑賞 児童文選』（帝国普通教育奨励学会）とその後継誌とみられるものについて検討をおこなうこととする。

## 1 『創作鑑賞 児童文選』

### (1) 書 誌

『創作鑑賞 児童文選』（帝国普通教育奨励学会、以下『児童文選』と表記する）は1927年頃に創刊されたものとみられる。創刊年月や創刊事情は未詳であるが、現存する第4巻第2輯が1930年2月号であることから逆算して、1927年頃に創刊されたものと推察されるものである。

『児童文選』第4巻第2輯の体裁は、菊判48ページである。表紙は、白地に黒一色の印刷で、上部に「創作鑑賞 児童文選」「二月号」の文字があり、飾り罫で囲まれている。表紙のカットとして児童の絵が用いられていることが辛うじて児童向けであることを示している程度で、きわめて簡素な装丁となっている。第三種郵便物の認可は得ておらず、定価も示されていない。また、裏表紙には広告等もなく白紙のままである。

発行元の帝国普通教育奨励学会（代表者・岡五郎）は東京府荏原郡碑谷町碑文谷27番地（現在の住居表示では、東京都目黒区目黒本町5丁目）所在の出版社である。代表者の岡五郎については、滑川道夫が後述の『鑑賞学習 新生綴方』の発行人としての岡五郎に言及する際に「岡五郎はスポンサーであった<sup>(2)</sup>」と記していること以外、経歴等は未詳である。

### (2) 性 格

『児童文選』の性格は、帝国普通教育奨励学会の「会則」でうかがうことができる。

「会則ノ抜粋

- 一、本会八学校及家庭ト連絡シテ児童ヲ奨励シ普通教育ノ進歩発達ニ資スルヲ目的

トス

- 一、本会八学校ト連絡ヲトリ会員児童ノ作品ヲ添削批評シ以テ直接指導シ向上ヲ計ル

- 一、本会ノ目的ニ達スルタメ毎月一回会誌ヲ発行シ主トシテ児童ノ佳作ヲ掲載シ会員ニ配布ス

- 一、会員ハ会費トシテ一ヶ年分金参円ヲ入会同時ニ納付セラル、モノトス<sup>(3)</sup>」

この「会則」を検討してみる。

一つ目の項目は、会の目的を示したものである。そこでは「学校及家庭ト連絡シテ児童ヲ奨励シ普通教育ノ進歩発達ニ資スル」としており、学校と家庭との橋渡しの役割を果たすことをかかげている。ちなみに、『児童文選』の表紙の裏には、次のような「心得」が掲載されている。

- 「一、朝は早く起きて夜は早くねませう
- 一、先生の教をよく守りませう
- 一、学校から帰ったら復習しませう
- 一、いひつけを守りませう
- 一、自分のことは自分でしませう
- 一、悪い遊びやあぶない遊びをせぬやうにしませう
- 一、お友だちや兄弟と仲よくしませう
- 一、学用品はそまつに使はぬやうにしませう
- 一、からだを丈夫にして良い人になりませう<sup>(4)</sup>」

ここに書かれていることは、綴方学習に固有に求められることではなく、また内容的に斬新なものでもなく、学校教育が児童に求めていることがらに他ならない。こうした「心得」を掲載することは、同会ないし『児童文選』の志向するものが学校教育と一体であることを児童や保護者、そして教師にアピールする意味があったものとみられる。

二つ目の項目は、添削批評に関することである。「学校ト連絡ヲトリ会員児童ノ作品ヲ添削批評シ以テ直接指導シ」とあり「作品」

の添削批評をおこなうものとしている。ここでいう「作品」とは綴方のことであり、同会は会員個々の綴方の添削批評をおこなうものであったのである。なお、「学校ト連絡ヲトリ」という文言の意味するものが、添削批評の内容が学校の国語科綴り方の授業に準拠するということなのか、担任を通して添削批評のための綴方作品のやりとりをするということなのかは不明であるが、いずれにしても、国語科綴り方の授業に対応する綴文力の向上を意図したものであったとみられる。

三つ目の項目は、会誌として『児童文選』を発行・配布することを明らかにしている。これは、『児童文選』が書店などで市販されるものではなく、会員配布の文集の性格をもつ雑誌であったことを示している。

四つ目の項目は、会費が1年分で3円であることを示している。1か月あたりの会費は25銭となる。さきに触れた類似誌の『鑑賞文選』や『綴方研究』が1930年段階においてそれぞれ菊判32ページではあるものの定価5銭であったことと比較すると、相当に高額なものとなっていることがうかがえる。これは、雑誌代のみではなく、添削批評の費用を含むものとして設定されたものと推察される。

こうしてみると、『児童文選』は、綴方の添削批評をおこなうことを主眼とした雑誌として、家庭での購読を想定して発行されたものということになる。

なお、『児童文選』第4巻第2輯に掲載されている綴方、童謡詩、書方、図画の作者の在籍校はすべて東京府内である。

### (3) 内 容

『児童文選』第4巻第2輯の「目次」は、次のとおりである。

「目次」	
綴方の心得	ママ 千葉春雄 5
児童優秀編	綴方 11

童謡詩	21
児童鑑賞編	綴方 25
児童作品笑ひ話	綴方 29
児童佳良編	綴方 30
童謡詩	43
今月書方のうまかつた人	45
今月図画のうまかつた人	45
編集後記	46 <sup>[5]</sup>

この「目次」で明らかなように、童話等の読物は掲載されていない。綴方関係以外では「書方」と「図画」に関して、優秀作品の図版と佳作を寄せた児童名の紹介に合計2ページを宛てている。また、47～48ページに相当する場所に投稿用の原稿用紙があるが、それ以外は、文話と綴方と童謡詩（童謡、児童詩）等で埋められている。

この雑誌の編集者、あるいは編集協力者が誰であるのかということについては、誌面では示されていない。編集後記も無署名である。

そうしたなかで、「綴方の心得」の筆者が「目次」で「千葉春雄」とあるのが注目される。当時の綴方教育界で「千葉春雄」といえば、1929年8月まで東京高等師範学校附属小学校訓導を務めたあと、教育ジャーナリズムの世界に転身して、1931年から教師向け雑誌『教育・国語教育』（厚生閣）の主幹、さらに1933年から児童向け雑誌『綴り方倶楽部』（東宛書房）の主宰者を務める千葉春雄（1890 - 1943）を想起させられるためである。しかしながら、本文の署名では「小学校訓導 千葉義雄」とあり、元東京高師訓導の千葉ではないことが判明するだけで、筆者の勤務校も明らかではなく、筆者を特定することはできない。

その千葉義雄の文話は、次のようなものである。

「綴方は自分の心持を出来るだけ深く書く様にしなければなりません。そしてお書きしやうと思ふ事をよく味はつて見る必要がある

です。又、お書きしやうと思ふ事の他にそれに付いての意味を見つけ出す事で『病気で非常に苦しんでゐる少年を書くと共に其の子供を思ふお母さんの言葉や、やさしい、かはいゝと云ふ深い心によつて、涙をこぼす』と、いふ様によく味つて行くやうに、心掛けていつもお書きすれば力のこもつた立派な文が出来得ると思ひます<sup>(6)</sup>」

綴方に「自分の心持」を書くということを指導するものであるが、その際に、書こうと思うことに意味を見つけ出すということを指導している。これは、書きたいことを書くだけではなくて、それに加えてその意味づけをすることを求めていることとなる。

たしかに、その文話に対応するような綴方が「児童優秀編」の一つとして掲載されている。

「蟻

東京市芝区靱絵小学校

尋三 橋本吉次郎

僕の家に庭があります。其の庭の中に蟻のすのあるのを見つけました。蟻のすの出入り口は小さな穴になっています。僕はすぐにお母さん『おさたうを下さい』といひますと、お母さんは『すこしなら上げますよ』とおつしやいました。僕はいたゞいたおさたうを持つて庭におりて見ますと、さつきの蟻がゐませんでした。僕は蟻の出て来るのを待つてゐますと、やがて小さな穴からひよこひよこはひ出してきました。そこでさつそくさつきいたゞいた、おさたうを蟻の前へ出してやりました。

ありはすぐ自分のお友だちを大ぜい呼んできておさたうを運びはじめました。十分ばかり遊んで又庭にきてみますと、蟻は一生けんめいにおさたうを自分のすへはこんでゐます。

僕は蟻のはたらいてゐるのをみて『僕たちも蟻のやうに一心にはたらけばどんなつらい事でも出来ない事はない』と思ひました<sup>(7)</sup>。」

蟻の巣を見つけ、砂糖を用意して蟻の観察

をしたことが書かれているものである。そして最後に教訓を学んだとする気持ちが書き足されたかたちになっている。

この綴方についての評の全文は、「とゝのつたよい文です。蟻を見ての心がけが感心です。そんな心掛けで居ればきつとしまひにはえらい人になれます<sup>(8)</sup>」というものである。筆者が興味を抱いて蟻の観察をしたことについての評はなく、最後の3行で教訓風に付け足したかに見えるところだけを評価しているものである。

こうした批評は、尋常科3年生用の修身科教科書の教材「がくもん」にある「金次郎は……せいだしてはたらいて、のちにはえらい人になりました<sup>(9)</sup>」という一文と重なり合うものである。評者の目は、筆者が蟻の観察をしたことには向いておらず、修身科教科書の求める徳目どおりのことを蟻の観察を通して再確認したとする部分のみを評価しているということとなる。この場合、綴方は修身科の求める徳目の復習の役割を果たすものとなっている。

## 2 『鑑賞学習 児童綴方』

### (1) 書誌

『鑑賞学習 児童綴方』（児童綴方教育奨励会。以下『児童綴方』と表記する）は、第2巻第5号（1930年5月号）から第4巻第3号（1932年3月号）まで不揃いながら現物が確認できる。

この『児童綴方』の発行所は、東京府荏原郡碑衾町碑文谷27番地の児童綴方教育奨励会、発行人は岡五郎である。『児童文選』の発行所が「帝国普通教育奨励学会」であったものがここで「児童綴方教育奨励会」と改められていることを除けば、発行所の住所や発行人は同一である。また、後に見るように両誌の「会則」も若干の異同は見られるもののきわめて類似したものとなっている。体裁も菊判

48ページで共通している。時間的な関係でみれば、『児童綴方』第2巻第5号は、前述の『児童文選』第4巻第2輯（1930年2月号）が発行されてから、わずか3か月後に発行されたものである。こうした点からみると、『児童綴方』は事実上『児童文選』の改題後継誌として位置づくものであろうと推察される<sup>108</sup>。そして、その改題は、『児童綴方』第2巻第4号（1930年4月号。ただし、未発掘）においてなされたものであろうとみられる。こうした推察を裏づけるものに、次のような読者の「おたより」がある。

「私は四月号児童綴方をいただいて見たときおどろきました。へうしはずいぶん美しくなりました。（以下略<sup>109</sup>）」

この「おたより」は、表紙が「ずいぶん美しく」なったことに驚いているものである。前述のように『児童文選』の表紙はきわめて簡素なものであった。他方、『児童綴方』の表紙について、現存する第2巻第5号から第3巻第3号（1931年3月号）までの号に即して確認すると、2色刷の同一の装丁となっており、同一の装丁が第2巻第4号から1年間続いたものと推察されるのである。そこで用いられている絵は、洋間の机の上には開いた本があり、机の隣にはシェードのある背の高い電気スタンドがある絵に、羽根ペンがインク壺に差し込まれている図を配したものであり、大人の書斎を描いたものとみられるものである。その絵は児童雑誌の表紙絵としては不自然な感じは否めないものであるが、簡素なものであった『児童文選』の表紙に比すれば格段の改善がなされていることは確かであり、先のような「おたより」が寄せられる理由も首肯されるものである。そして、その「おたより」が『児童文選』4月号に即して寄せられたものであったことから、その時点で表紙が刷新されたものと推察されるのである。

なお、『児童文選』の装丁は、その後、第

3巻第4号（1931年4月号）から新たなものが1年間にわたって用いられたものと見られる。第3巻第7号（1931年7月号）から第4巻第3号（1932年3月号）までの号で確認すると、セーラー服に半ズボン、ソックス、革靴姿の男児が、ブラウスにスカート、ソックス、革靴姿の妹の肩を抱いてソファに座って絵本を読んでやっている絵が用いられていることによる推察である。ここにいたってようやく子どもの姿が表紙絵に登場することとなるが、その際においても、表紙絵は都市部の上流家庭の生活のイメージで貫かれている。これは、『児童綴方』が学校で副読本として用いられるものではなく家庭で読まれるものであったこと、また、比較的高額な会費を負担できるような経済的に豊かな家庭を基盤としていたことと対応しているものとみられる。

## （2）編集体制

『児童綴方』の編集体制については、「顧問」「編輯顧問」「賛助員」の名前を列举する形で明らかにされている。ただし、結果から見れば、当初から確立していたわけではなく、時間を追って拡充していくものとなっている<sup>110</sup>。

「顧問」として挙げられているのは、1930年5月号段階では佐々木秀一（東京高等師範学校附属小学校主事）のみであり、6月号段階で桜井美（東京府立青山師範学校附属小学校主事）が加わって2人となり、1931年に入って二階源市（東京府立豊島師範学校附属小学校主事）が加わって3人となり、東京の三つの師範学校附属小学校の主事の名前が並ぶこととなる。

「編集顧問」としては、1930年段階では、天野文吾（東京府立青山師範学校附属小学校訓導、1931年から東京市駒本小学校長）、守屋貫秀（東京府立女子師範学校附属小学校訓導）、岩村博（東京府立豊島師範学校附属小学校訓導）、山口猪祐（東京市本郷小学校訓導）

導)の4人となるが、1932年段階では、守屋が外れて、新たに福島鶴吉(東京府立女子師範学校附属小学校訓導)と綿貫数夫(東京府立豊島師範学校附属小学校訓導)が加わって、5人となっている。

これらのうちで、文話等の執筆者として誌面に登場したことが確認できるのは、「編輯顧問」とされた山口猪祐<sup>13)</sup>、天野文吾<sup>14)</sup>、綿貫数夫<sup>15)</sup>の3人とどまっており、「顧問」の佐々木と桜井、また「編輯顧問」の守屋、岩村、福島の具体的な関与は確認できない。

さらに、「賛助員」として、支持者とみられる教師の名前が列挙されている。第4巻第3号(1932年3月号)には31人の名前があるが、その勤務先はすべて東京府内である。東京市内に勤務している者が19人、東京市外に勤務している者が12人であり、東京市外勤務者のうちの11人は1932年10月に東京市に編入される地域のものである。したがって、31人の「賛助員」は1人を除いて東京府の都市部(1932年10月以降の東京市域)に勤務するものであったのであり、『児童綴方』が東京府の都市部を基盤とするものであったとことが察せられるのである。

### (3) 性 格

『児童綴方』の性格は「児童綴方教育奨励会々則」でうかがうことができる。

- 「一、本会八学校家庭ト連絡ヲ計リ児童綴方教育ノ向上発達ヲ期スルヲ以テ目的トス。
  - 一、本会八所期ノ目的ヲ達スルタメニ毎月『児童綴方』ヲ発行シテ会員ニ配布ス。
  - 一、本会ノ趣旨ニ賛同シ、会費ヲ添ヘテ入会ヲ申込ミタルモノヲ会員トス。
  - 一、会費ハ一ヶ年分金一円八拾銭トス。但シ金九拾銭宛分納スルコトヲ得。外ニ会誌送料式拾四銭ヲ納ムルモノトス。
  - 一、会員ノ希望ニヨリ作品ヲ批評添削シテ直接指導ヲナスモノトス<sup>16)</sup>。」
- この会則を、前述の帝国普通教育奨励学会

の会則と比較してみよう。

一つ目の項目は、会の目的を「児童綴方教育ノ向上発達ヲ期スル」こととしている。以前は「普通教育ノ進歩発達ニ資スル」ということにとどまって、綴方教育という用語は掲げていなかったものであり、ここで綴方教育に焦点化することを明確にしたこととなる。ちなみに、『児童文選』にあった書方や図画は『児童綴方』には掲載されていない。

二つ目の項目は、会誌『児童綴方』を会員に配布することを明らかにしている。従来は「主トシテ児童ノ佳作ヲ掲載シ」とあったが、その文言はここでは外されている。これは、児童作品や文話等のほか、童話等を掲載することを念頭においたものとみられる。

三つ目の項目は、会員制であることを明らかにしている。これは、項目としては新しく設けられたものであるが、会員制をとること自体は従来と同様である。

四つ目の項目は、会費について明らかにしている。ここでは、会費を1か年1円80銭としており、従来の1か年3円に比すれば6割に減額され、1か月あたりは15銭に改められている。それでも、前述した類似誌に比すればなおも高額なものであったことには相違ない。

五つ目の項目は、批評添削について言及している。従来は「添削批評」の会であったが、ここでは「会員ノ希望ニヨリ」「批評添削」おこなうものに改められている。なお、ここでも「批評添削」の方法についての具体的な提示はなく、『児童文選』にあった投稿用原稿用紙もなくなっている。

### (4) 内 容

『児童綴方』各号の構成は第2巻第5号(1930年5月号)から第4巻第3号(1932年3月号)までほぼ同じである。一例として、第3巻第10号(1931年11月号)の目次を示してみる。

「正しい文から美文へ.....巻頭言	1
口絵写真.....	1
文話 よそ行きの言葉はいけない	
.....綿貫数夫	3
童謡と自由詩.....	3
鑑賞綴方.....	10
上品な子猫.....津島早苗	10
あらし.....岡崎千鶴子	15
日曜の午前.....安香初子	17
優秀綴方.....	19
鑑賞童謡.....	29
佳作綴方.....	30
童話 かしこいむすめ.....山田稔	43
編集後記.....	48 <sup>17)</sup>

この号に限らず、巻頭言につづいて文話がある。巻頭言は無署名であるが、その号の文話を凝縮した内容となっている場合が多い。

そのあと、児童の綴方や童謡が掲載されている。また、『児童文選』にはなかったが、『児童綴方』では童話が掲載されている。ちなみに、上掲の目次にある童話の作者・山田稔は、本誌の編集実務者でもある。また、目次には反映していないものの、囲み記事の形で童謡詩人の童謡、たとえば、島木赤彦の「雀」(第2巻第10号)、金子みすずの「お魚」(第3巻第2号)、百田宗治の「どこかで春が」(第4巻第3号)などが紹介されている。このように童話や童謡詩人の童謡が掲載されることによって、読物としての性格が加味されたことになる。

しかし、基本的には、学校での綴り方の授業時間に書けないで困ることがないような綴文力を育てることを目指していたものとみられる。実際問題として、綴り方の時間に書くことが見つからずに困る児童がいたのである。『児童綴方』には次のような綴方が掲載されている。

「だいまくがわからない

東京府豊島師範附属小学校  
尋三 柴田孝恵

あゝ何にしようかしら、私はだいまくがわかりません、もう友成さんや吉植さんは七八行もお書きになりました。私は気がもめてもめてたまりません。皆さんだいまくがおわかりと見えてずんずん書いていらつしやいます。考へてゐるのは私だけです。早く早くと誰かが耳もとでさゝやいてゐるやうに思はれます。時間はずんずぎて行きます。もう二十分ぐらゐしかないでしょう。まわりのお方は皆いそいそとお書きになつてゐらつしやいます。ほんとうに困つてしまひました。

何の題にいたしませう。もしかおかねがなつてしまつたらおしまひに未完と書かなければなりません。私はほんとに困つてしまひました<sup>18)</sup>。」

綴り方の時間に、書くことが見つからなくて困ったことを苦し紛れに綴ったものである。

したがって、保護者においても、我が子が綴方が書けるようになることは大きな関心事であった。『児童綴方』には綴方とは別に、読者からの「おたより」が掲載されており、そこには保護者に勧められて会員となる様子が記されたものがある。

「私は会員となつてもう一年はゆめのやうに、すぎました。忘れもしません、丁度、去年の遠足のあくる日のことでした。きのふのことを綴方にかいてみると、親るいの美和子さんのところへいらつしやつたお母さんがおかへりになつて『あなたは、どうしてそんなに、綴方ができないでせうねえ、今日美和子さんのお綴方を見せていただきました、とてもよく出来てゐますよ、美和子さんは学校からかへるといつも児童綴方をはなさず、読んでゐるので、今ではらくにすらすら書ける様になつたんですつて、これからあなたも会員にさせていただくやうお願いしましたから一生懸命勉強なさい、とおつしやいました。それから間もなく、心待ちにしてゐた、児童綴方を手にした時はうれしさで一ぱいでした。毎日よんでは、自分でたくさん書きました。その為

め、今ではよい文だといつてほめていただくやうになりました。(後略)<sup>20)</sup>」

「先生(編集部のこと - 引用者)僕はお友だちからそんな会員(『児童綴方』の会員 - 引用者)なんかつまらないといわれましたが先生よりおきゝしてあんしんしました。これから先もよろしくおねがひいたします。僕はべんきようしてよいせいせきをとれば、お母さんよりごほうびをくださるそうです。それをたのしみに、毎日学校からかへるとすぐにべんきよういたします。それからすこし遊びます<sup>21)</sup>。」

また、『児童綴方』の会員となって、綴り方の成績が「甲」ばかりであるという報告もみられる。

「私は児童綴方の会員ですが、いつも綴方の成績が良くなかったが昨年の十二月会へ入会してからずつとよくなつていつも甲ばかりいたゞいて来ます。本をよんでから綴方の時間には『おだい』などいつも困つた事はありません。これも会のをかげかと思つて、よこんで一生けんめいにやつて居ます<sup>21)</sup>。」

こうした「おたより」によって、保護者や児童にとって、国語科綴り方の成績も児童の学業成績の一環であり、その成績向上への願いは他の教科と並ぶものであったとみられる。また、そうした願いに応えることが『児童綴方』の役割であったといえよう。

こうした役割を担う『児童綴方』が推奨するものは、表現技術の優れた綴方を生み出すことにあった。上掲の目次にある文話「正しい文から美文へ」は次のように述べられている。

「『自分の心持ちをありのままに書く。』といふことは、綴方の金言である。このありのままに書くといふことは、読者にその事柄をあやまりなく伝へやうといふのである。これが正しい文である。／私どもは、その心もちをあやまりなく伝へるばかりでなく、心もちよく、よい感じをおこさせるやうに、よい言葉をえらんで書きあらはすやう工夫をしなけ

ればならない。／つまり正しい文の上に、よい感じをおこさせるやう言葉づかひ、文の順序などに気をつけて、美しい文を書きあらはすやう努めなければならない<sup>22)</sup>。」

「自分の心持ちをありのままに書く」ということを前提とはしつつも、そこでは「自分の心持ち」を対象化して見つめるといったようなことには関心がはられず、それをいかに効果的に表現するかということに主要な関心が払われている。こうした綴方観に対して、数か月後には同誌の編集実務者の山田が異論を呈する記事を書いている。

「美しい語句や、かざつた文より、ありのまゝを、そのまゝあらはした文がだんだんふえていく事はどんなにか心づよい。美しい文は第二である。しつかりした自分たちの生活をみつめて書きあらはした文ほどたゞとい<sup>23)</sup>。」

「自分たちの生活を見つめる」という際の「生活」をどのようにとらえるかということ抜きには評価できないし、山田自身が、「生活」についての自説を展開しているわけではない。ただ、少なくともことばの上では、編集実務者の山田には、同時代の生活綴方教育の動向が念頭にあったものとみられる。

### 3 『鑑賞学習 新生綴方』

#### (1) 書 誌

1932年5月に『鑑賞学習 新生綴方』(児童綴方教育奨励会、以下『新生綴方』と表記する)が創刊されている。5月の創刊時には、中学年用と高学年用の2種類が発行され、その後、9月に低学年用(表紙の表記は『シンセイツヅリカタ』)が発行されて3種類が揃うこととなる。

『新生綴方』発行元の児童綴方教育奨励会は、前述の『児童綴方』の発行元と全く同じであり、誌名のサブタイトルに「鑑賞学習」が用いられていることも共通している。したがって、事実上『新生綴方』は『児童綴方』



の後継誌とみられる。

体裁は、3種類それぞれ菊判32ページで定価5銭であり、『児童綴方』に比べるとページ数は3分の2、価格は3分の1にあたる。また、中学年用と高学年用は「昭和七年六月二九日第三種郵便物認可」、低学年用は「昭和七年十月二五日第三種郵便物認可」である。ここにいたって、低価格で市販雑誌の体裁を備えたものとなったこととなる。そして、廉価としたことで、従来は家庭での購読が想定されていたのに対して、ここでは学校での購読をも想定するものとなっている<sup>(24)</sup>。

表紙は3色刷りとなり、表紙の絵柄も、低学年用は指揮棒を振るピエロと擬人化されたアヒルとカラスが歌っている様子を描いた童心主義的なもの<sup>(25)</sup>、中学年用は男児と女児が一緒に登校する姿<sup>(26)</sup>、高学年用は家庭の食卓らしいところで綴方を書く男児とそばに立った女児の姿<sup>(27)</sup>となっている。『児童綴方』の装丁に比べれば、いっそう児童に親しみやすい表紙絵になっていることがうかがえる。

編集体制については「顧問」「監修」「責任編輯」「賛助員」として氏名を列挙するなかで明らかにされている<sup>(28)</sup>。「顧問」としては、『児童綴方』の顧問でもあった佐々木秀一、桜井美、二階源市（1933年より東京府視学官）の3人に加えて、飯田恒作（東京高等師範学校附属小学校訓導）、馬淵伶佑（東京高等師範学校嘱託）、加藤囚（東京市視学）、岡野徳右衛門（山形県視学、1933年より福岡県立福岡師範学校附属小学校主事）、定村国夫（奈良県視学）の名前があり、東京府以外の地域の人物2人が含まれるものとなっている。そのうち、飯田と馬淵は「監修」をも兼ねている。

具体的な形で編集に関与したのは「責任編輯」として名前が挙げられている天野文吾（低学年主任）、綿貫数夫（中学年主任）、山口猪祐（高学年主任）とみられる。前述の『児童綴方』とのかかわりで見れば、そこに

文話等を執筆していた3人が『新生綴方』3種それぞれの主任となったということとなる。なお、低学年主任は、1933年初頭に向山嘉章（東京市竹早小学校訓導）に交代している。

「賛助員」は1932年5月段階では29人の視学や訓導の名前がある。そこには、東京府内の29人の他に、東京府外の8人が挙げられている。1933年2月段階では、東京府内の視学や訓導の36人、東京府外の秋田県、栃木県、茨城県、埼玉県、神奈川県、愛知県、大阪府、兵庫県、徳島県、宮崎県、台湾の視学や訓導の12人が挙げられている。全国誌としての展開をうかがわせるものである。

## (2) 性 格

『新生綴方』創刊の趣旨については、次のように述べられている。

「新生綴方発刊の趣意

『綴方は人生科なり。』といふ語は、児童生活を総合概括して直観することが出来るといふ立場から、かく言はれることゝ信ずる。

また、『文は人なり。』とも言はれてゐる。これは文によつて、其の人の持つてゐる思想感情を十二分に表現し得て、自ら其の作品である文を通して、人柄を了解することが出来るといふ意味であらう。

更に児童の姿を具に観察すれば、児童には『発表本能。』ともいふべきものがあつて、それを率直に口頭で話の形で、又書綴つた本（「文」か - 引用者）の形で、短い詩の形で、自由奔放に表現して止まないものである。

この発表本能を誘導し、旺盛ならしめ、整理して本能から意識的作業に迄押上げるのが、綴方教育である。

今日迄は、綴方教育は学校の専有であつた。併し何時までも学校内に封建的籠城を許さるべきでない。

学校から生きた社会へと、綴方教育の分野を拡充さるべきである。

この綴方を社会教育分野の線上へ押し出し

て行くのが、我新生綴方の新使命である。

つまり指導者にとっては新鮮な資料の提供をなし、児童にとって発表本能の遺憾なき自由の天地たらしめて、綴方本来の真面目を如実に発揮せしめて、常に生気脈々、伸展止むなき児童の生命、生活の発展拡充に資したい<sup>(29)</sup>。」

ここで示されている綴方観の一つは、「綴方は人生科」ということである。これは、1910年代から芦田恵之助らによって主張されたことである。

また、児童の「発表本能」に依拠して「児童の生命、生活の発展拡充」をはかるということにも触れている。これは、田上新吉の『生命の綴方教授』（目黒書店、1921年）や峰地光重の『文化中心 綴方新教授法』（教育研究会、1922年）等に見られる生命主義に通じるものであった。そこには、また、鈴木三重吉主宰の『赤い鳥』（赤い鳥社、1918年創刊）等に見られる芸術教育運動の影響も見られる。

さらに、「今日迄は、綴方教育は学校の専有であつた。併し何時までも学校内に封建的籠城を許さるべきでない。学校から生きた社会へと、綴方教育の分野を拡充さるべきである」として、綴方教育が学校から社会へと拡充すべきとする。また、「この綴方を社会教育分野の線上へ押し出して行くのが、我新生綴方の新使命である」ともいう。ここでいう「生きた社会」や「社会教育」という用語の内容は曖昧なものであるが、おそらくは、綴方の題材を児童自身の日常生活からのみ取材するような従来の綴方にとどまらず、児童をとりまく社会にも目を向けさせていこうとすることを表現したものと思われる。その意味では、同時代の生活綴方の動向を意識したもののといえよう。

このようにみると、「新生綴方発刊の趣意」にはとりたてて斬新なことが主張されているわけではないものの、1910年代から1930年代

までの綴方教育の思潮が併存する形で表現されているといえよう。

### (3) 内 容

『新生綴方』を現物で確認できるのは5号分にとどまる。ここでは、一例として、中学年用の第2巻第2号（1933年2月号）の目次を示してみる。

鑑賞童謡	
けが.....	西條八十 2
父さんのマント.....	水谷まさる 22
鑑賞児童文	
昨夜の暴風雨.....	山田とき子 4
うれしかったが.....	中路美文 6
にくらいいじき.....	井上章子 8
雨ふりでつまらない.....	山本フジ子 9
こすずめうた.....	高木よね子 11
文話	
にぎりない心で.....	12
童話	
母を尋ねて三千里.....	14
児童作品	
綴方と童謡.....	24
文題と漫画	
文題.....	31
漫画.....	25 <sup>(30)</sup>

内容構成としては、漫画が増えた程度で、『児童綴方』と類似したものである。ただし、従来のように文話を冒頭には置かず、読物の一つとして文話が位置付けられていて、編集上の工夫がみられる。

綴方の批評においては、文章表現技術に注文を付けるのではなく、書かれた内容に共感することを先行させている。たとえば上掲の目次にある「昨夜の暴風雨」は800字ほどの綴方であるが、評は400字ほどを費やして「ほんとに、ぢごくへはいつたやうな心持がしたことゝ思ひます。……かういふ時は、こわいもてすね<sup>(31)</sup>」というようなかたちで書き手に共感しているのである。

低学年用においては、こうした姿勢はいつそう徹底している。家にスズメが毎日やってくるようになっていたことを書いたあとで「この二三日来ません。私はしんぱいしてみます」と終わる綴方<sup>(32)</sup>への評は、「ほんたうに、どうしたことでせう<sup>(33)</sup>」のひとことであり、表現技術への批評はない。

筆者に共感するだけで課題の示唆がないという面があるが、まずは児童の「発表本能」を肯定してそれに依拠して表現を育てていくという点において、『新生綴方』の趣旨の一つに合致した評となっている。

#### 4 『新生綴方読本』への統合による終刊

『新生綴方』の発行が現物で確認できるのは、1933年2月号（低学年用と中学年用のそれぞれ第2巻第2号）までである。

その後については、『新生綴方読本』第79号（1933年6月号、郷土社）における次のような「社告」で動向をとらえることができる。

今回、母の雑誌社、児童綴方教育奨励会、郷土社の三社を合同いたしました。そして児童綴方教育奨励会発行の『新生綴方』と郷土社発行の『綴方読本』を合併して『新生綴方読本』とし郷土社より発行します。御支援を願います。

母の雑誌社 鷲尾 知治  
児童綴方教育奨励会 岡 五郎  
郷土社 小砂丘忠義<sup>(34)</sup>

この「社告」によれば、児童綴方教育奨励会が郷土社と統合し、それとともなって『新生綴方』と『綴方読本』（『鑑賞文選』の改題後継誌、1930年9月創刊）とが統合して『新生綴方読本』（郷土社）として続刊するというものである。

出版社の統合に伴う雑誌の統合として説明されており、児童綴方教育奨励会の経営的な

理由によって生じた雑誌の統合とみられる。これにより、『新生綴方』は事実上、終刊したのであった。

#### おわりに

1927年頃に創刊されたとみられる綴方学習雑誌『児童文選』と、その後継誌と見られる『児童綴方』『新生綴方』について概観してきた。史料的な面での制約により、全貌を正確にとらえることは出来ないが、おおよそ次のようなことが明らかとなった。

『児童文選』は、綴方の「添削批評」を目的とする会の会誌であり、会員の綴方文集としての性格をもつものであった。その後の『児童綴方』においては誌面を改善して読物を加えるが、「批評添削」の会の会誌という性格は保持していた。このような会誌は、東京府の都市部（1932年10月以降の東京市域）の教育に関心の高い家庭に基盤を持っていたものとみられる。1932年には、会員制をやめて市販雑誌『新生綴方』として再発足をしたが、おおよそ1年後には、類似誌に統合する形で終刊している。

『児童文選』や『児童綴方』のような性格の綴方学習雑誌は、綴り方の学業成績向上に対する保護者側の願いに支えられて存在したということができよう。

こうした動きがなぜ1920年代半ばから生じたのかについては、綴方教育の動向とともに、都市部における進学競争の激化とも関わりがあるものと見られる。今後の課題としたい。

- (1) 『児童の綴方』第2巻第2号（1920年2月号）から改題されている。なお、本誌の編輯顧問は、芦田恵之助（東京高等師範学校附属小学校訓導）と小瀬松次郎（成蹊学園小学校主事）であった。
- (2) 滑川道夫『日本作文綴方教育史3昭和編』国土社、1983年、408ページ。
- (3) 『児童文選』第4巻第2輯（1930年2月号）巻末。

- (4) 『児童文選』第4巻第2輯(1930年2月号)表紙裏。
- (5) 『児童文選』第4巻第2輯(1930年2月号)2ページ。
- (6) 千葉義雄「綴方の心得」『児童文選』第4巻第2輯, 5ページ。下線は引用者。
- (7) 『児童文選』第4巻第2輯, 12~13ページ。下線は引用者。
- (8) 『児童文選』第4巻第2輯, 13ページ。下線は引用者。
- (9) 文部省『尋常小学修身書 巻三』1919年, 10ページ。
- (10) ただし、両誌の巻号表記がそれぞれ正確なものであるならば、改題ではなく、1929年には『児童文選』第3巻と『児童綴方』第1巻が、そして1930年には『児童文選』第4巻と『児童綴方』第2巻が、それぞれ並行して発行されていた可能性もある。この点は、当該時期の両誌の発掘を待つ他はない。
- (11) 本郷光子「おたより」『児童綴方』第2巻第5号(1930年5月号)48ページ。
- (12) ここでの記述は『児童綴方』第2巻第5号(1930年5月号)から第4巻第3号(1932年3月号)までの間に掲載された「顧問」等の名簿に依拠している。
- (13) 山口の執筆したものに次のような文話がある。「綴り方のお話」第2巻第5号(1930年5月号)、「生活観照は綴方の生命である」第2巻第6号(1930年6月号)、「手紙と日記の文章に就いて」第2巻第8号(1930年8月号)、「遠足や運動会の模様を書きあらはすことについて」第2巻第10号(1930年10月号)、「『行き詰まりを打開くこと』について」第3巻第3号(1931年3月号)、「『手紙の文』の認め方に就いて」第3巻第7号(1931年7月号)、「『実感』を力強くあらはせ」第3巻第11号(1931年12月号)。なお、山口の著書に『児童の創作意欲に出生したる綴方教育の実際』(秀文館, 1928年)がある。
- (14) 天野の執筆したものに次のような文話がある。「綴り方の御話」第2巻第7号(1930年7月号)、「綴り方のお話」第2巻第9号(1930年9月号)、「綴り方のお話」第3巻第2号(1931年2月号)。なお、山口の著書に『綴り方教育の本質を見つめて』(教育実務社, 1931年)がある。
- (15) 綿貫の執筆したものに次のような文話がある。「文の中心」第3巻第8号(1931年9月号)、「よそ行きの言葉はいけない」第3巻第10号(1931年11月号)、「文題のつけ方」第4巻第3号(1932年3月号)。なお、綿貫の著書に『綴り方の縦の研究』(明治図書, 1931年)がある。
- (16) 『児童綴方』第2巻第5号(1930年5月号)巻末。
- (17) 『児童綴方』第3巻第10号(1931年11月号)表紙裏。
- (18) 『児童綴方』第2巻第9号(1930年9月号)18ページ。
- (19) 山路道子「おたより」『児童文選』第2巻第6号(1930年6月号)48ページ。
- (20) 池田米次郎「おたより」『児童綴方』第2巻第7号(1930年7月号)48ページ。
- (21) 牧山秀子「お便り」『児童綴方』第3巻第7号(1931年7月号)47ページ。
- (22) 無署名「正しい文から美文へ」『児童綴方』第3巻第10号(1931年11月号)1ページ。
- (23) 山田「後記」『児童綴方』第4巻第3号(1932年3月号)48ページ。
- (24) 『新生綴方』の広告中には、「購読についての御願ひ」の項目において「鑑賞教材として、文話資料として、副読本として、課外読本として、家庭自習用として、どこまでも、児童の児童のよき伴侶たるを期し、将来益々いろいろの方面に努力する覚悟でをります」「幸にして御校各学級に御採用いたゞき、又諸先生から、各児童に御推薦を願ふことが出来ますならば本会無上の幸と信ずる次第であります」というように、学校・学級での採用を期待している。『新生綴方』高学年用, 第1号(1932年5月号)綴じ込み広告による。
- (25) 『シンセイツツリカタ』第1巻第1号(1932年9月号)の表紙による。第1巻第2号(1932年10月号)、第2巻第2号(1933年2月号)の表紙絵も同じである。
- (26) 『新生綴方』中学年用, 第2巻第2号(1933年2月号)も同じである。
- (1933年2月号)の表紙による。
- (27) 『新生綴方』高学年用, 第1号(1932年5月号)表紙による。
- (28) 『新生綴方』高学年用, 第1号(1932年5月号)および『シンセイツツリカタ』第1巻第1号(1932年9月号)・第1巻第2号(1932年10月号)・第2巻第2号(1933年2月号)による。
- (29) 『新生綴方』高学年用, 第1号(1932年5

『児童文選』とその後継誌についての研究

- 号) 綴じ込み広告 .
- (30) 『新生綴方』中学年用, 第2巻第2号(1933年2月号) 1ページ .
- (31) 『新生綴方』中学年用, 第2巻第2号(1933年2月号) 6ページ .
- (32) 堀川睦子「すずめ」『シンセイツツリカタ』第2巻第2号(1933年2月号) 28~29ページ .
- (33) 『シンセイツツリカタ』第2巻第2号(1933年2月号) 29ページ .
- (34) 『新生綴方読本』尋常二年, 第79号(1933年6月号) 32ページ .

付 記

本論文は, 日本学術振興会科学研究費基盤研究(CⅡ2)による研究成果の一部である.